

準備完了次第カオバンに集結、カオバン保塁に入る。連隊本部、第二大隊本部はカオバン保塁に、各隊はフランス軍の兵舎に、各陣地にと警備部署に就く。カオバンの地形は保塁の前に川があり（大きな）、四方は小高い山に囲まれた町でした。住民も三々五々散歩し町の中は賑わっていました。市場も開かれ、戦争中なのかと思うくらいでした。

そのうちに各陣地から小高い山に中国軍の陣地が肉眼でも見えるようになり、異常な状況になってきました。八月中旬後半に終戦を知り、各隊が慌ただしくなってきました。陣地の死守するとか降服するとか、不安な言葉を耳にする。連隊本部の電報班では交信時間が多くなってきました。私も応援。「部隊は速やかにウオンピに集結すべし」の命令で、進撃した道路を折り返し、ウオンピに集結。自活生活に入りました。

昭和二十一年三月下旬、内地帰還のため海防（ハイフォン）港に集結。四月上旬に「リバティーV〇〇八」に乗船帰国の途につきました。名古屋上陸直前、コレラ患者が発生したため、浦賀に回航されて隔離になりました。

ました。六月になってようやく浦賀に上陸し、復員準備手続をすることができました。六月六日、連隊解散、六月十一日に帰郷することができました。

湘桂作戦

—大溶江口撤収作戦—

福島県 安田 義三

私は福島県の矢吹町で農家の次男として生まれ、そこで成長しました。ご存知のように、その時分の農家の次男、三男は都会に出るか、満蒙義勇団に参加するほか生活の手段はなかったのです。幸い私は県内の開拓地に入植でき、五年目ころからようやく軌道に乗り始めたと思ったところ突然の召集です。

妻と三歳の長女と生後三カ月の長男の四人暮らしでした。

昭和十七年の九月、新潟県の村松部隊です。そこで三カ月の猛訓練を受けましたが、幸いなことに宮城県、

福島県と郷土出身の兵が主体で、次に新潟県の人が多かったようです。

戦線は南に南にと拡大の一端でしたので、三カ月で除隊などと甘い考えは持たず、家内にも銃後の守りのことをくれぐれも頼みました。

千葉県の佐倉連隊に転属しました。満州へ行くのか南方に行くのか見当もつきませんでした。十二月も押し迫ったころ、普通の軍服が支給されました。南方へ行く予定の兵には夏服でした。

門司から一路南下、船中で南支と告げられました。敵潜水艦を警戒しながらの航海は緊張感の連続でした。途中、高雄に停泊し、甲板と、波止場の間を籠の上げ下しでバナナやパイアの取り引きしたことは後々までの思い出になりました。

海が黄色くなると黄埔です。上陸したのは奇しくも十二月三十一日、広東で正月を迎えました。出光隊に仮泊し、翌日それぞれの中隊に配属になりました。私の配属先は独立歩兵第二十二旅団独歩第六十六大隊第四中隊第二小隊です。珠南分遣隊といい、珠江を見下

ろす丘の上の三階建ての兵舎でした。

湘桂作戦が始まるまで、珠南、河南、江門と警備に専任しましたが、物資など内地より余程潤沢で、食べる物には苦勞しませんでした。

教官の見習士官は訓練が厳しく、一木一草といえども生命の盾だとそれはそれはたいへんでした。渡河作戦、トーチカ攻撃と実戦ながらです。気候になれる、食物に馴れるが口癖でした。百朋街や大溶江口の戦闘にけが一つしなかったのも訓練のお陰と思っております。

― 湘桂作戦に参加されましたか ―

私たちは初年兵で戦争の全貌とか目的地とかはなかなかわかりません。復員してから歴史、戦史、部隊史などを読んでようやく自分の所属している部隊の任務やら行動がわかった次第です。

支那派遣軍の大部分の師団を動員して、南北から桂林を攻め、飛行基地を叩き、サイゴンから上海まで大陸の縦貫を計るという大作戦です。当時初年兵の私に

は知る由もありませんでした。

三埤攻略、梧州攻略、柳州と作戦は順調に進みました。順調といっても作戦中、百朋街、大鳥山、羅漢山の激闘をくぐりぬけてきました。柳州で西江を渡河し、桂林を過ぎるころから周辺の様子がおかしくなってきました。

大鳥山、羅漢山の戦闘は突出した第十一軍の撤収の援護でしたが、柳州から第四中隊はいつのまにか兵団の最後尾になり左右、後方はすべて敵です。前後体系を整え、部隊主力を追及する途中、敵の待ち伏せ部隊に遭い交戦し、突入撃退したこともあります。このとき、全員に嫌な予感が走りました。これは退却ではないかと。

桂林を後に靈川を通過、我が福岡部隊が大溶江口に辿り着いたときは七月二十日前後のことだったと思います。この間重慶軍は桂林―全県間の公路を遮断するため猛攻をかけ、我が軍は必死に反撃し全軍の全県収容を急いだのです。福岡部隊は十一軍収容援護のため大溶江口、六層嶺山地に展開を命ぜられたのです。大

隊主力は第一、第二、第四中隊で六層嶺、筋竹山西翼に陣地占領をし前面高地に展開中の敵と対峙しました。七月十七日ころから八月七日ころまでが大溶江口付近の山地戦とみていいでしょう。

重慶軍は桂林から靈川、興安、全県と続く公路沿いの西部山地を占領し執拗に公路と部隊の分断を計り攻勢にてくる。

この期間中、各中隊とも小競り合いの戦闘が続いたが、多くの戦死傷者を出した七月二十四日の我が第四中隊の戦闘をお話します。

日没前に六層嶺台地を確保、第二小隊が突出した小高い瘤に陣地を構築、日没とともに警戒を厳にし稜線上を動哨していました。残念ながらそのとき、敵情に關しては全く不明でした。近くから小石を集め斜面に投げ敵の隠密行動を阻止しました。

十二時過ぎ、いきなり小隊の突角陣地に銃声の音と手榴弾の炸裂音。一瞬にして阿鼻叫喚の世界になりました。敵は多勢そして地形を熟知している模様。我が小隊は

ジリジリ後退し始めました。そこへ瘤の頂上目掛けて我が中隊の機関銃と第一中隊の重機の援護射撃、曳光弾が夜空に飛び交う。中隊長の援護命令で山の背近く進んで来た第三小隊と協力、一挙に突撃、頂上を奪回しました。悪夢の一瞬で、即死、戦傷者で十名近くの犠牲者が出ました。ほんのわずか一時間ほどのことなのにとその無惨さと残酷さにただ茫然自失の様でした。今でも悔やまれることは、師とも兄とも尊敬していた櫻井伍長の戦死です。たった五分前まで私の傍らで小銃で射撃していたのに、と思うとやりきれなさが先にたちます。

それから小競り合いが続きましたが、大きな戦闘はありませんでした。しかし、寒さと飢えにはこたえませんでした。夜間になると延々と全県に引き揚げるトラックの列、P51の攻撃を避けての夜の行動です。ああ、他の部隊は引き揚げて行く。我々はいつまでこの陣地を死守するのだろうか。私たちは捨て駒だろうか。口には出さないが兵の思いは同じだった。

五日も対陣が続くと忍耐が焦燥に変わってきます。

睨み合ったままの神経戦から解放されたいとの祈りに似た願望が心を支配し始めました。

ついに大溶江口からの撤退命令ができました。多くの犠牲者を出しながら、敵はついに我が堅陣を突破出来ませんでした。全軍が無事に撤収できたので殿部隊の独歩第六十六大隊が死守したためと自負しています。しかし撤収する我が軍の直ぐ後方を敵がひたひたと追ってきていました。

虎口を脱し全県に辿り着いたのは確か八月十二日、執拗に追尾して来る敵を第十一軍は全力を挙げ反撃し、我が大隊もこれに加わり今までの溜飲を下げました。

反撃の数日後、日本がポツダム宣言を受諾したと中隊長から話がありました。兵にポツダム宣言と言っても分かるはずがありません。日本が負けたということですが、一瞬これからどうなるのかも思いましたが、死なずにすんだということと、死んだ人はいかにかわいそうだと痛切に感じました。

昭和二十一年六月鹿児島に上陸したとき、嬉し涙が

ポロポロ出ました。家内は私が復員した安心感からか一月近く寝込んでしまいました。長女は小学生でしたが、私の出征する三カ月前に生まれた長男が、私が帰国してから二カ月後急病で亡くなったのは、かえすがえすも残念です。今ならよい薬もあり助かったことと思います。

崑崙関の戦い

島根県 清水良一

昭和十一年徴集の第二補充でした。召集は昭和十三年九月、浜田歩兵二十一連隊補充隊へ入隊しました。両親健在で、一町五反ほどの農家の長男で、結婚はしていませんでした。当時は事変直後のことで歓呼の声に送られて村の駅から雄々しく出発しました。

原隊で初年教育を受けた後、北支青島へ上陸、歩兵二十一連隊第十中隊に編入されました。海州作戦参加が初めての戦闘参加でしたが、この作戦討伐は大きな

戦闘に遭遇することはありませんでした。

次いでノモンハン救援のため、我々第五師団は急遽鉄道輸送で北上を開始し、四平街に到着した時点で停戦となり、あの熾烈なノモンハン前線に出ずに終わり、旅順に集結しました。

旅順では軍旗祭が開催され、行事の銃剣術の対抗試合に選ばれて出場しました。旅順から師団は再び乗船、どこともなく出航しました。ふと気付いて見れば見覚えのある宇品港で宮島の鳥居も遥かに望見できました。

「凱旋だ」「帰還だ」との歓喜も束の間、夕刻には船団は補給を完了し、行方知れない大海原へ就航が始まりました。船団は十一月、一路廣西省南寧を目指して猛進を開始しました。

南寧突入のための渡河戦の激突は第一大隊によって行われ、武勲は連隊史に長く留まることとなりました。

我々の中隊は、南寧市郊外に駐留、警備に任じていましたが、十二月初め敵の大部隊の南下の情報のもと、当時マラリヤ患者の比較的少ない我々の小隊が中隊から選ばれて出発することとなりました。部隊が警備地